



藍や紅茶、自然の色で染め上げた麻100%の縁。

農業や化学物質を使わない畳表や畳床の研究・製作を進めている植田昇さんが、縁まで自然素材にしたいと開発した、無農薬栽培の麻使用の縁。藍や紅茶で染めたものも。【健康畳植田】

畳縁

洗って縫いつけ直すこともできる丈夫な和紙の縁。

和紙造形作家・山口智子さんによる手漉き和紙の縁。紙を漉く段階で色土を混ぜたり、乾燥後に漆をかけたりして着色。最後にこんにやく糊を塗って強度を出した。霧吹きで少し湿らせてから他の畳縁同様に縫いつける。洗ったり裏返して使用することもできる。【クマイ商店】



上/上が籐むしろ。黄みがかった色は、時を経るほどに藍色に輝く。1㎡あたり¥55,000〜(参考価格)。下は籐あじろ。端の処理まで緊張感がある。下/特注の麻糸を使い、糸を通したところができるふくらみがきれいに揃うように、手で微妙に調整しながらつづいていく。【松野藤敷物 tel 076-475-4093】



小幅の反物から発展 パリエーションは無限に

畳表と畳床をくるむ畳縁には、畳床までほこりが入り込んだり、歩行によって畳が擦れるのを保護したりする役割がある。強靱な畳縁は、年数の経った畳表を裏返して使うのと同様に、洗って裏返して再び縫いつけられた。

中世の貴族階級においては、錦織の柄をほどこした纏網縁や、大小の地紋を織り込んだ高麗縁などの文様や色の使い方に、身分によって規定があった。いまも、寺社仏閣などでは、そういった特殊な縁を見ることが出来る。住宅などの床畳に紋縁が使われることもある。

現在、一般的なのは畳縁専用につくられた製品だが、畳縁はもともと、綿、麻、絹の小幅の反物を畳屋が縁に仕立てるものだった。昭和に入ってゲートルの細幅リボンが織られるようになり、その技術が応用して、純綿や混紡の製品「光輝縁」が生産されるようになったのである。

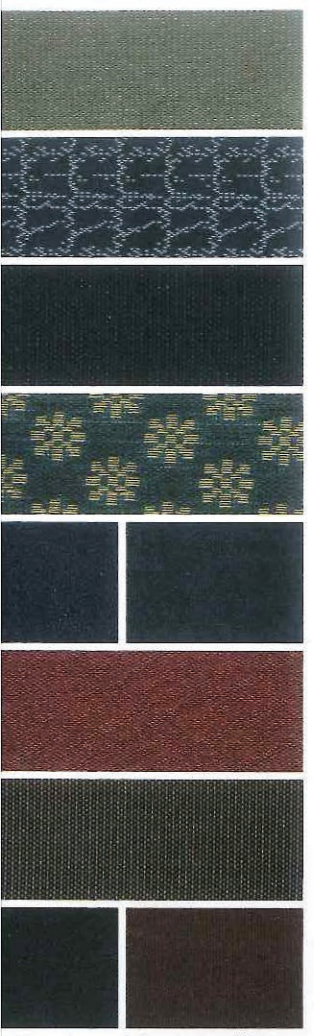
昭和30年代には化繊の縁が登場。柄物

粋に縁を出立たい

もつくりやすく、昭和40年あたりから普及し始めて主流となりいまに至っている。機械化によりオリジナル柄のオーダー、少量生産にも対応できるようになり、抗菌や防虫機能を備えたものなどもある。岡山(倉敷)、福井などが一大生産地となっている。

現在でも、手間さえ厭わなければ、好みの布地を畳縁として縫いつけることができる。ただし、あまり弱い布地だとすぐに破けてしまう。また、模様やテクスチャーがはっきりしたものより、シンプルで平滑なおさまる布地のほうが敷いたときにしっくりくるようだ。

京間、関東間といつて畳にはいくつかの大きさがあるが(55ページ参照)、関西では細めの縁が好まれる傾向があり、関東でも粋な下町や茶室などでは意匠的に細くしているところがある。細い縁は、空間を広く見せる効果もある。職人にとって細くなるほど難しい仕事になる。



ファッションタウンNo15、紺No1。高田織物 彩・鉄紺【松井織物】コンフォートNo102、光輝縁 左/紫紺、右/鉄紺。【以田織布】ファッションタウンNo25【高ソフト-600【松井織物】光輝縁 左/錦赤茶。【以上、石田織布】

上の上のきもの ◆ 松野藤敷物の籐むしろ

な北アルプスの山嶺を背景に富山湾へと扇状に広がる山県滑川市では、大正から昭和のはじめにかけて栄えた頃、漁に出られない天候の日などに、下駄と部分に貼る「籐表」の製作がさかんに行なわれ、口3万人のうち実に3,000人はこれに携わっている。

ろが昭和6〜8年頃から靴が普及し、籐表の需要も、従事者も消えていった。しかし小さな鉋で籐を薄く加工する(挽く、という)高度な技術を廃れさず、惜しいと、当時名古屋で製造されていた籐敷物を習得した先代が、松野藤敷物を創案する。

インドネシアなど熱帯アジアに生育する植物。堅くで敷物にするとひんやりと感じられ、浴場の脱衣にいられることからわかるように、吸放湿性に優れた。日本の夏座敷を涼しげに演出する敷物で重宝されてきた。かつては滑川と千葉県銚子が産地、銚子では車の座席の背あてなどが多くついていたようだ。しかしこうした涼をとるための籐製造は冷房の普及とともに衰退し、敷物を国内でもの松野藤敷物くらいになってしまった。

籐むしろ製造の工程は、まず籐の色、長さ、太さを基準に分類。湯で1本1本洗い、曲がりは炭火で炙って矯正する。そして縦方向に割り、さらに敷く場所や用途に応じた厚みや太さを考慮しつつ平滑にそぐ。厚さ数mmのその1本1本に幅方向に水平に通すよう5〜7cm間隔で穴をあけ、麻糸でつづってゆく。最後に極く薄く挽いた籐の皮で端をかがる。籐をそぐ工程こそ機械化した。経験ある人の手の加減なしには成り立たない仕事である。

お寺の座敷などで見かける「籐あじろ」もかつては製造していた。広い敷地や人手が必要になることなどから現在は残念ながら行っていないが、修理は変わらず受けている。いくつか見本を見せてもらうと、密に編まれた目はどこもくまなく、繊細なあじろを保護するため、丁寧に美濃和紙が裏打ちされていた。

最近では東南アジアからの材料が減る一方、完成品での輸入が進んでいる。「材料がなくては……」と嘆く2代目の松野豊助さんだが、むらなく艶やかな表面の美しさはもちろん、裏返してもびしりと籐の列が揃い、少しくらい力を加えてもゆがまない精度の高さは、触れば忘れられないものである。

上から。大宮縁「浮」No19、ファッションタウンNo36。【以上、高田織物】紬-60。【松井織物】コンフォート小紋オリブ、光輝縁(左上から時計回りに)金鷲、納戸、銀黒、【以上、石田織布】